

平成二十九年作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部

学位記授与式 式 辞

春浅くいまだ風が冷たく感じる三月、本日ここに、卒業生・修了生の皆様が、学位記を手になされ、本学から新たな世界に巣立っていかれることに対し、大学教職員と在學生を代表して心からお祝い申し上げます。また、今日の日に至るまで皆さんを支えてくださったご両親、ご家族の方々に、敬意と心からのお祝いを申し上げます。

栃木県知事様をはじめ、ご来賓各位には、ご多忙の中を本学の学位記授与式にご臨席を賜り、心からお礼申し上げます。

平成二十九年の作新学院大学の学位記授与者は次のとおりです。大学院経営学研究科経営学専攻博士後期課程修了者一名が博士（経営学）の学位を取得、さらに同専攻前期課程アカデミックコース修了者八名が修士（経営学）の学位を取得しました。大学院心理学研究科臨床心理学専攻修士課程修了者は、十二名が修士（臨床心理学）の学位を取得しました。

学部卒業生は、経営学部一三五名が学士（経営学）、人間文化学部六十九名が学士（人間文化学）、合計二〇四名が学士の学位を受けました。学部卒業生と大学院修了生の中には、海外からの留学生十四名が含まれています。

また、女子短期大学部幼児教育科の卒業生は、一三四名であり、短期大学士（幼児教育）の学位の授与を受けました。

本日ここに学位を授与された皆さんは、作新学院の建学の精神で

ある「作新民」から導かれる「自学・自習」「自主・自律」の二つの教育方針を胸に、大学及び女子短期大学部のそれぞれの専門分野において研鑽を積み、自ら主体的に行動する若者として、物事を本質的に、そして総合的に捉えるアプローチの方法を学びました。しかし、その「学び」は皆さんの長い人生における「学びのはじまり」でもあります。「学び」の本質は、世の中のさまざまな課題や問題に対して疑問を持つ批判的思考、いわゆるクリティカル・シンキングにあるといえます。

皆さんが、これから一步踏み出そうとする社会や世界には、数々の課題や問題が山積しています。国内では、今年で七年目となる東日本大震災、原発事故のあの惨禍は、いまだ復興・復旧の途上であり、とくに原発事故の後始末にはこれから四十年以上が必要であろうといわれております。現在でも、全国で約七万三千人が避難生活を送っています。また、産業や科学の分野においても、人間が機械を調整していた第三次産業革命から、人間の変わりにAI（人工知能）が機械を自動制御する第四次産業革命へと急速に進んできています。さらに、生命科学や医療の分野でも、ゲノム解析や遺伝子操作に代表されるように、バイオサイエンスが大きな変革の時代を迎えようとしています。こうした産業革命や科学の急激な進歩は、私たち人類に対して、「人間とは何か」という人間存在や、人間一人一人の生き方それ自体をいやでも考えないわけにはいかない状況に追い込んできているといえます。確かに、科学の進歩は、人類にと

って重要であることは言うまでもありません。しかし、人類が利便性や快さだけを求め続けていく中で、それに対してブレーキをかける倫理観や責任感が失われることがあれば、いつしか歯止めが利かなくなってしまう危険性があることも事実です。その一つが、地球温暖化などの環境問題です。将来の世代のために持続可能な社会を築くことを目的として結ばれたパリ協定をはじめ、世界的規模で改善策が検討されていますが、一方で、一国第一主義を掲げるアメリカは脱退の意向を示しています。こうした問題以外にも、先進国を中心とした少子高齢化問題や、平和を脅かす国家間、宗教間、民族間などの対立の問題があります。

人々が宗教・文化・民族を超えて地球市民として平和に暮らすことは、二十一世紀の夢であり課題です。先日のICANへのノーベル平和賞の授賞式で被爆者のサーロー節子さんの次の言葉は大変印象的です。

「私は十三歳の少女だったときに、くすぶる瓦礫（がれき）の中に捕らえられながら、押し続け、光に向かって動き続けました。（中略）どのような障害に直面しようとも、私たちは動き続け、押し続け、この光はこの一つの尊い世界が生き続けるための私たちの情熱であり、誓いなのです。」

本日学位を有した皆さんに期待することは、こうしたさまざまな問題や課題が自分とは直接関係のないことであると切り捨てるのではなく、少しでも自己との関係性の中で思考していただきた

いということであり、できれば自分の身近な所から行動・実践して
いてもらいたいということです。

さらに加えて、これから社会に踏み出す皆さんに、ぜひ次に掲げる
力を養っていただければと考えています。第一は「想像する力」
です。想像する力は、やがてもう一つの「創造する力」、すなわちク
リエイティブする力へと連動し、さらにイノベーティブなアイデア
の開発を導き出すこととなります。第二は「共感する力」です。相手
の立場に立って感じる心です。「共生感」という言葉があります。す
べてのよりよく生きようとしているものを認めようとする寛容な感
覚です。第三は柔軟に「思考する力」です。既存の価値観にとらわれ
ることなく、さまざまな視点から考えつづけるということです。例え
ばダーウィンは生物学者だと思われていますが、本来は地質学者で
す。多面的多角的に見ることにより学ぶ楽しさを見出し、新たな発見
へと繋がります。第四は「つながる力」です。これは広い意味でのコ
ミュニケーション力です。つながりは決して人間だけではありません。
生きとし生けるすべてとのつながり、あるいは宮澤賢治のように、
自然のさまざまな事象を命(いのち)あるものとしてとらえてつな
がりをもつことも含まれます。そして最後は「挑戦し行動する力」です。
一人では不可能なことでも、多くの人々とネットワークを形成して
いけば、不可能なことでも可能になります。ぜひ仲間と共に考えたこ
とを実行に移して行ってください。

たくさんあげさせていただきましたが、どれか一つでも良いと思

います。ぜひこうした「力」を、これからの皆さんの長い人生の中で、自らの素地を耕していく上で養って行ってください。これを、私からのみなさんへのメッセージとします。

最後になりますが、作新学院大学および女子短期大学部も、「作新民」の精神により、教職員や在学生と力を合わせて日々進化していきます。ぜひ見守って行ってください。そして応援してください。今年大学が三十周年、短期大学部が五十一年目を迎えます。現在大学は、「多様性」が求められています。本来大学は多様な学生が学ぶ場であり、学び直しの中にもあります。皆さんにとって、この作新学院大学、女子短期大学部はいわば学びの「ホーム」です。いつでも気軽に尋ねて来てください。

卒業生・修了生の皆さんが、この学舎（まなびや）において「作新民」の精神に学んだ誇りを持って、社会人として活躍されることを期待し、私の式辞といたします。

平成三十年三月十八日

作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部

学長 渡邊 弘